

第9分科会

大学におけるアセスメントテスト (ジェネリックスキル測定テスト)の 活用事例

報告者

- 酒井 陽年 氏 株式会社リアセック 教育事業グループ マネージャー
出口 貴大 氏 共立女子大学・共立女子短期大学 キャリアセンター 職員
山本 博子 氏 京都橘大学 教学事務部教務課 課長補佐
椋平 淳 氏 大阪工業大学 工学部 教授

コーディネーター

- 金子 貴昭 氏 京都先端科学大学 人文学部 准教授

大学におけるアセスメントテスト (ジェネリックスキル測定テスト)の活用事例

コーディネーター

京都先端科学大学 人文学部 准教授

金子 貴昭

○本分科会のねらい

全国の大学において、学生本人による学修の振り返りや成長の実感、強み・弱みの把握と能力伸長を目的として、大学生のジェネリックスキルの測定テスト（アセスメントテスト）が実施されている。その実施効果を高めるためには、測定結果をもとに、大学が学修支援・キャリア支援、それらを通じた教育研究活動の質保証と継続的な改善につなげることが必要となることはいうまでもない。テストを実施する大学が多い一方で、テストの実施、測定結果のより良い活用方法について苦慮し、手探りを続ける大学もまた多いことが予想される。そこで、本分科会では、河合塾とアセスメントプログラム「PROG」を共同開発した株式会社リアセックの酒井陽年氏に PROG テストの全体的な説明を行っていただいた上で、共立女子大学・共立女子短期大学の出口貴大氏、京都橘大学の山本博子氏、大阪工業大学の椋平淳氏から、特徴的な取り組みや測定結果の活用事例、問題点などについて報告していただき、今後どのようにテストを位置づけ、実施効果を高めていくことができるのか、登壇者と会場が共同して議論できる場とすることを目的とした。

○報告の概要

講演 1・酒井陽年氏は、大学の内部質保証の全体像を示された上で、各大学から共通して寄せられる問題点（テスト結果のデータ解釈や、改善策検討の不十分さなど）を指摘された。その上で、ジェネリックスキルをリテラシーとコンピテンシーの2側面から測定する PROG の概要を示された。また、PROG 尺度（小分類 33 要素）はディプロマポリシー（DP）との紐付けが可能であり、学修成果を各大学の指標に変換する事例も紹介された。PROG 結果は、教職員には教学 IR や FD・SD 支援など、学生に対しては学修支援やキャリア支援などに活用可能であり、客観データに基づく大学の内部質保証に寄与する仕組みとして、PROG の全体的な説明をしていただいた。

講演 2・出口貴大氏が所属する共立女子大学・共立女子短期大学では、大学が PROG 結果を含めた各種データを関係教職員へ公開し、各部門によって自己点検・評価がおこなわれ、改善計画や重点計画が策定されている。PROG に関わる教学の取り組みとして、大学が掲げる「リーダーシップ」教育の更新、コンピテンシーアッププログラム、学生参画型 FD を紹介していただいた。学生・就職支援の事例としては、キャリアデザインシート、PROG と絡めた正課外活動冊子やシステムの準備、面談、解説会、ワークキャリアプログラム、リフレクションセミナーなど、成長や行動変容を促す取り組みを紹介していただいた。出口氏は、PROG は「活用」するための仕組み・仕掛けが重要である点を強調され、上述の連動的な取り組みの軸となる体系的なキャリア科目の構築準備にも触れられた。

講演 3・山本博子氏が所属する京都橘大学では、学生自身が成長を振り返るための参考指標として、あるいは大学が学生指導・キャリア支援をおこなう際の情報として PROG 結果が参照されている。共通教育課程では、教育目標とリテラシー・コンピテンシーを紐付けた自己点検・評価が予定されている。専門教育課程においては、学科 DP と PROG の中分類を対応させ、学科 DP の到達状況の現状確認と課題整理、研究教育内容のブランド確立・学生の自信創出を図る学科の事例を紹介していただいた。総じて、個人レベル・組織レベルで PROG が活用されているが、総合的には、PROG という外部視点を一つの指標と捉え、「可視化と対話」に活用するという姿勢についてご説明いただき、後述の討論における一つの論点が提示された。

講演 4・椋平淳氏が所属する大阪工業大学では、ディプロマ・サプリメントシステムを独自に開発されており、その可視化項目のひとつに PROG テストジェネリックスキルが位置づけられ、スコア発表後に学科毎に解説会が実施されている。システム活用による学生の自己点検として、セルフチェックシートが運用されており、自己評価と改善計画が提出され、学生・教員のコミュニケーション素材として活用されている。

また、コンピテンシーの伸長が大学広報にも活用されている他、PROG 結果は学科ごとに年次分析され、課題の把握に活用されているなど、現状をご説明いただいた。さらに、PROG 結果と T-GPA とのクロス集計など、今後の活用の方向性も示され、最後に、PROG テストの活用方法は多様であり、各大学の強みを生かす独自の活用方法の構築を提唱された。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

4本の講演後、まず、登壇者間の質疑応答をおこない、次に会場からの質問を受けて登壇者が回答する形式で討議をおこなった。討議の内容は、①いかにジェネリックスキル測定テストを学部・学科まで浸透させるか、②時代に合わせた PROG テスト内容更新の可能性、③ PROG テストと DP との紐付け（共通・教養科目のみならず、専門教育の DP にどのように紐付けるか）に大別される。

①では、学部・学科の意識によって浸透の度合いに濃淡があるという悩みが共有された一方、少子化時代に生き残りをかけた危機感を大学内で共有し、研究のみならず教育にも注力する過程でテストの重要性を浸透させる方法、学生参画型 FD を実施し、学生が実感した成長、教員が意識する成長を促す方法、無意識に成長につながっていた点などを共有することにより、PROG テストの効果に対する理解を浸透させる方法が報告された。

②は、現在の PROG の質問形式を決めてから十数年経過していることを踏まえ、今の時代に合わせた更新をリアセックが予定しているかに関する質疑である。酒井氏より、現代の産業構造に合わせた改変は容易であり、すでに体制も整っているが、企業調査を踏まえ、現状の内容（測定項目や行動特性）が現在も必要とされている点を検証済みであり、また、すぐに更新すべきか否かを常に注視しているとの回答があった。

スライド 1

2026年3月

PROG
PROGRESS REPORT ON
GRADUATE STUDIES

～第31回FSDフォーラム 第9分科会～

内部質保証ならびに学生のキャリア支援を目的とした
ジェネリックスキル測定PROGのご案内

株式会社リアセック
教育事業グループ マネージャー 酒井 陽年

スライド 2

はじめに(別イベントで実施した学修成果の可視化の懸念点)

Q.現在の学修成果の可視化における課題について教えてください

懸念点	割合
学修成果の可視化が、学生のモチベーションを低下させるのではないか	18%
学修成果の可視化が、学生の学習意欲を低下させるのではないか	17%
学修成果の可視化が、学生の学習態度を低下させるのではないか	16%
学修成果の可視化が、学生の学習成果を低下させるのではないか	14%
学修成果の可視化が、学生の学習効率を低下させるのではないか	12%
学修成果の可視化が、学生の学習コストを低下させるのではないか	10%
学修成果の可視化が、学生の学習環境を低下させるのではないか	9%
学修成果の可視化が、学生の学習機会を低下させるのではないか	8%
学修成果の可視化が、学生の学習方法を低下させるのではないか	7%
学修成果の可視化が、学生の学習内容を低下させるのではないか	6%
学修成果の可視化が、学生の学習時間を低下させるのではないか	5%
学修成果の可視化が、学生の学習場所を低下させるのではないか	4%
学修成果の可視化が、学生の学習手段を低下させるのではないか	3%
学修成果の可視化が、学生の学習ツールを低下させるのではないか	2%
学修成果の可視化が、学生の学習方法を低下させるのではないか	1%
学修成果の可視化が、学生の学習内容を低下させるのではないか	1%
学修成果の可視化が、学生の学習時間を低下させるのではないか	1%
学修成果の可視化が、学生の学習場所を低下させるのではないか	1%
学修成果の可視化が、学生の学習手段を低下させるのではないか	1%
学修成果の可視化が、学生の学習ツールを低下させるのではないか	1%

スライド 3

理想と現状のギャップが課題

理想に対して、現状はどうなのか
そのギャップを埋めるためにどうするのか

As-Is (現状の姿) To-Be (あるべき姿)

Action (どうすればあるべき姿になるか)

Gap (課題)

スライド 4

内部質保証の全体像

01 理想の具現化

- ① 基本方針の策定
- ② アセスメントプランの策定
- ③ 目標値の設定

02 現状の把握

- ④ 学修成果の可視化
- ⑤ 教学IR

03 理想と現状のギャップ(課題)の客観的検討-実行

- ⑥ 課題の共有
- ⑦ エビデンスを元にした改善実行

スライド 5

内部質保証を進めるにあたり、よく伺う問題点①

特に赤字は多くの大学で共通して感じる課題

- ❑ DPが学生・教員に浸透していない
- ❑ 各DPの抽象度が高く、教職員間での解釈が一貫していない
- ❑ 達成すべき主要指標が定まっていない
- ❑ 目指すべき項目のベンチマークが定まらず、ゴールが不明瞭なため、分析結果が知的的好奇心にとどまる

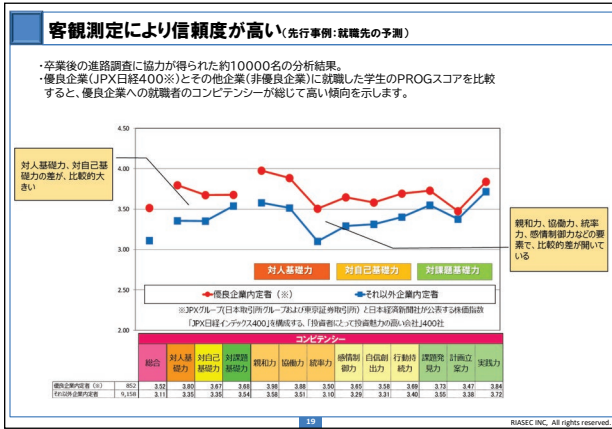
スライド 6

内部質保証を進めるにあたり、よく伺う問題点②

特に赤字は多くの大学で共通して感じる課題

- ❑ 受験者数が少なく、データの代表性が低い
- ❑ スコアが安定しない(高年次で伸びない)
- ❑ DPの汎用的能力部分に対して、コンピテンシー評価ができていない
- ❑ 他大学との比較ができず、ガラパゴス化しており、データのインパクトが伝わらない
- ❑ 通常業務が忙しく、分析に手が回らない
- ❑ 伸長者の分析を行う際、初期値の影響を除去できていない。

スライド 19



スライド 20

PROGの測定について

- 受験方法: マークシートまたはWEBでの受験が可能です。
- 測定時間: ①リテラシー 30問 45分 (タイマー設定あり)
 ②コンピテンシー 195問 目安40分 (タイマー設定なし)
 ③アンケート 共通アンケート (新入生/在校生)
 大学独自アンケート (WEBは設問上限制限なし / フリー回答可)

- WEB受験の例 -

受験後、数分で結果表示
 ※印刷した紙での結果納品も可能です。

スライド 21

主な納品物

報告書(他大学比較)や在校生調査との分析
 ローデータ ※PROGのスコア+大学独自アンケート(最大40問)
 学生カルテ(個人結果要約版)

自分の強みがわかる結果報告書
 強みの伸ばし方がわかるハンドブック
 学生向け解説会(対面/オンライン/オンデマンド)

紙返却の場合
 オンライン返却の場合

支援メニュー

- 教学IR支援
- FD/SD
- 大学PR制作
- 個別面談支援
- 【低学年】大学生生活の行動計画支援
- 【高学年】大学生生活の振り返り/就活支援

スライド 22

導入実績が多く他大学比較が可能

多くの学校でご利用いただいているため、他大学群との比較を通じて、自学の強みや課題を把握する事が可能です。

2012年度のリリース以来、毎年導入校数・受験者数は上昇
 2024年度単年度実績
 導入校数 約 300 大学 受験者数 約 24 万人
 ※累計256万人受験

偏差値: 55以上60未満 12%, 60以上 4%, 40未満 24%, 40以上45未満 14%, 45以上50未満 25%, 50以上55未満 20%

学問系統: 芸術 2%, その他 8%, 人文科学... 35%, 社会科学 35%, 理学 4%, 工学 21%, 農薬 2%, 保健 7%, 教育 7%

スライド 23

様々な支援事例

事前準備 受験 学生向け解説会 教習IR/分析 進路へのフィードバック その他

体制づくり 機能化

事例 1: 教習IR/分析
 ・DPFレポートの活用
 ・DPFレポートの活用
 ・DPFレポートの活用

事例 2: 受験
 ・PROG
 ・受験準備
 ・受験準備

事例 3: 学生向け解説会
 ・説明会
 ・説明会
 ・説明会

事例 4: 教習IR/分析
 ・IR/分析
 ・IR/分析
 ・IR/分析

事例 5: 進路へのフィードバック
 ・フィードバック
 ・フィードバック
 ・フィードバック

事例 6: その他
 ・その他
 ・その他
 ・その他

スライド7

リーダーシップの共立 Major in Anything, Minor in Leadership

01 PROG実施概要と活用促進の背景_受験フロー

タイミング	1年次	3年次※大學生のみ	卒業年次
目的	<ul style="list-style-type: none"> PROGの結果を踏まえて、自分らしい「共立リーダーシップ」とは何かを考え、見つける 自らの強みと弱みを知り、「キャリアデザインシート」に記入した目標の達成に向けた行動のきっかけにする 自己成長やキャリア形成、進路選択に活かす 	<ul style="list-style-type: none"> (1年次の目的に加え)1年次の受験結果と比較することで自らの成長度を把握し、就職活動等における自己PRの作成に活かす 	<ul style="list-style-type: none"> 入学時および大学3年次の受験結果と比較し、自身の成長度を把握する
開催会	あり	あり ※「PROGを活用した自己PR作成講座」として実施	なし ※結果を確認し各自で振り返り
受験率 (直近年度)	97%	93%	62%

※1・3年次は2016年度から、卒業年次は2022年度から実施

スライド8

リーダーシップの共立 Major in Anything, Minor in Leadership

01 PROG実施概要と活用促進の背景_活用促進前の課題

PROBLEM ①

学修成果/教育成果を客観的に示すデータ不足

PROBLEM ②

多種多様な学内活動における客観的な評価(評価軸)のバラつき

PROBLEM ③

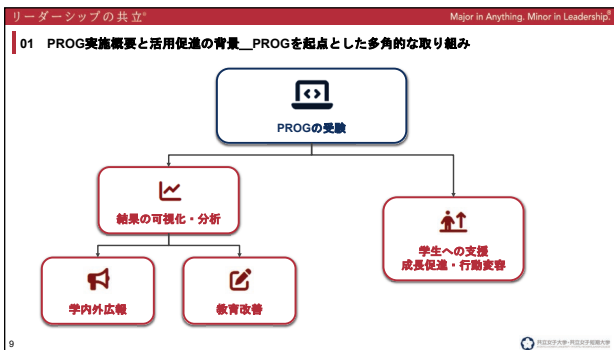
PROGが「直」で存在し振り返りや次のアクションへの結びつきの弱さ

PROBLEM ④

学生へのPROG実施価値の浸透(受験率の低下)

測定して終わりではなく、「活用」するための仕組みや仕掛けが必要

スライド9

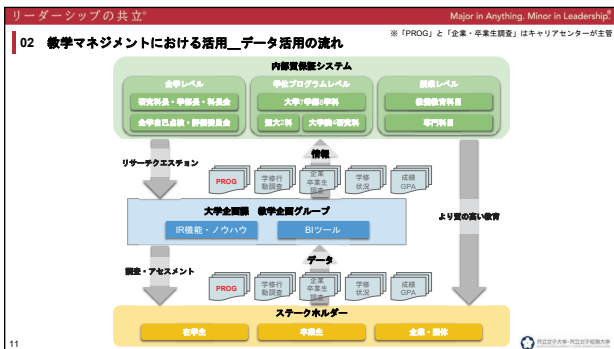


スライド10

リーダーシップの共立 Major in Anything, Minor in Leadership

02 教学マネジメントにおける活用

スライド11



スライド12

リーダーシップの共立 Major in Anything, Minor in Leadership

02 教学マネジメントにおける活用_データの可視化

□ PROG結果を含めた各種データはBIツールで可視化
□ 「学部カルテ」として関係教職員へ公開

スライド 13

リーダーシップの共立 Major in Anything, Minor in Leadership!

02 教学マネジメントにおける活用_自己点検・評価から教育改善までの流れ

Check

自己点検・評価シート

自己点検・評価報告書

2023年度

各部門が「学部カルテ」等を用いてエビデンスに基づき自己点検・評価

各部門の点検・評価結果や外部評価結果、学生評価結果をもとに全学的観点から自己点検・評価

Action

学長からの改善指示

改善計画・重点計画策定

組織的なSD・FDによる支援

改善計画策定による教育改善

13

スライド 14

リーダーシップの共立 Major in Anything, Minor in Leadership!

02 教学マネジメントにおける活用_取り組み事例①

課題

リーダーシップ教育の実質化

各教員が各学生のリーダーシップの成長に寄与し、教員と学生が成長していること

PROGの活用

定基データに加え、定後データから成長要因を特定してリーダーシップの成長に必要な支援を確認

当日投影のみ

成果

2025年度より教員教育にてリーダーシップを全学必修化

PROGデータを1つのエビデンスとして活用し改善内容を検討

14

スライド 15

リーダーシップの共立 Major in Anything, Minor in Leadership!

02 教学マネジメントにおける活用_取り組み事例②

課題

最大の就職率とPROGコンピが全学比で低い

PROGの活用

「加次コンピテンシーアッププログラム」
学生：PROG視点でのリフレクションの機会を提供し成長実感を得る
教員：PROG実践と関係FDにより理解を深めPROGを活用した支援につなげる

当日投影のみ

成果

2024年度就職率 98.7%に上昇
コンピ平均値 2.55で数増

単年度の結果のため取り組みと成果検証を継続して実施予定

15

スライド 16

リーダーシップの共立 Major in Anything, Minor in Leadership!

02 教学マネジメントにおける活用_取り組み事例③

課題

全学的なコンピテンシーの伸長

コンピテンシーPROG対応に関する理解と推進方法の周知が不足している

PROGの活用

「学生のコンピテンシー伸長に向けたFD研修会」を開催
PROG実践、関係上存じた学生への公開インタビュー、ディスカッションを実施しコンピテンシー（PROG）とその伸長方法への理解を促進

当日投影のみ

成果

当日投影のみ

16

スライド 17

リーダーシップの共立 Major in Anything, Minor in Leadership!

03 学生・キャリア支援における活用

17

スライド 18

リーダーシップの共立 Major in Anything, Minor in Leadership!

03 学生・キャリア支援における活用_冊子やシステム等のツール

キャリアデザインシート（ポータル）

当日投影のみ

- 入学前編、1年前期末編、1~4年修了時編の計6冊記入
- 入学前編はこれまでも繰り返しながら興味のあることやこれからの目標、実現してほしいこと等を記入
- 以降は、設定した目標の達成状況振り返り、今後すべきことや実現してほしいこと等を記入
- 2023年度から紙質をプラスチックアップし、「再立リーダーシップ」や「PROG」を踏まえて記入できる内容に

キャリアから考える教養教育科目の選び方（冊子）

当日投影のみ

- 「キャリア」の観点から教養教育科目の履修選択を支援するための冊子
- 入学後のガイダンスにて配布し、履修計画に役立ててもらう
- キャリアに関するプログラムの紹介も入れており、PROGに関する説明も掲載

18

スライド 19

リーダーシップの共立[®] Major in Anything, Minor in Leadership[®]

03 学生・キャリア支援における活用__冊子やシステム等のツール

PROG冊子で共立生が語る正課外活用術！(冊子)

当日投影のみ

- コンビテンシーまたはリテラシーを伸ばせる学内のプログラムを紹介し行動変容を促すための冊子
- 活動に参加した学生生のインタビューの掲載し、実際にどんな取り組みを経てどう成長したのかがわかる
- PROGの解説を行う際に配布し次のアクションにつなげる

Kyointsuキャリアナビ(システム)

当日投影のみ

- 正課外活用術の冊子に掲載している各プログラムとPROGの別図をベースにした、個人に合ったプログラムを提案するシステム
- 冊子と同じく教員の席に活用し、プログラムの申込(実際の行動)までを促す
- 正課外活動への参加意向も全国
- 2020年度より運用開始

19

スライド 20

リーダーシップの共立[®] Major in Anything, Minor in Leadership[®]


03 学生・キャリア支援における活用__成長や行動変容を促す機会と仕掛け

担任(アカデミック・アドバイザー) 個別
カウンセラーによるキャリア相談

当日投影のみ

- ガイドラインに基づき、学部ポートフォリオ(成績やPROGレポート・ポートフォリオ)やキャリアデザインシートを踏まえて指導することとしている
- 学生の得意や傾向の把握、自己理解や自己PR作成支援のためにPROG結果をデータの1つとして活用

PROG懇談会



- 1年生と3年生を対象に、PROG発表後に懇談会を実施
- PROG結果をもとに自分の強みや弱みを自己理解する
- 自分の強みや弱みを踏まえて今後の目標設定をする
- 3年生は就職活動を見据えて自己PRの作成につなげる

20

スライド 21

リーダーシップの共立[®] Major in Anything, Minor in Leadership[®]


03 学生・キャリア支援における活用__成長や行動変容を促す機会と仕掛け

ワークキャリアプログラム
(@増休室・インターンシップ)

当日投影のみ

- 卒業後の目標において、PROGを踏まえた自己分析や目標設定、振り返りを実施(キャリアデザインシートをもとに活動)
- 企業側に依頼する個人別の評価シートもコンビテンシーベースで評価していただける内容とし、卒業後や学内にも活用

リフレクションセミナー



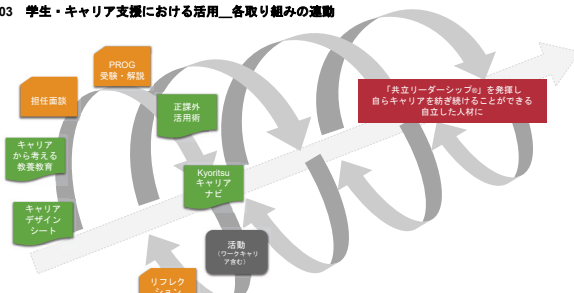
- これまでの学生生活での様々な経験を振り返り、強みの発見、再確認や成長実感を得て、次の目標(行動目標)の設定を行う
- 経験活動も見据えて採用担当者の目線を理解し、「オウチカ」の組み立て方も学ぶ

21

スライド 22

リーダーシップの共立[®] Major in Anything, Minor in Leadership[®]

03 学生・キャリア支援における活用__各取り組みの連携



22

スライド 23

リーダーシップの共立[®] Major in Anything, Minor in Leadership[®]

04
現状の課題と今後の展望

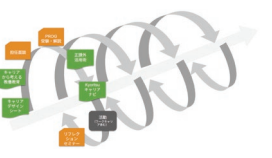
23

スライド 24

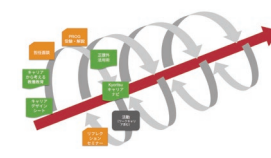
リーダーシップの共立[®] Major in Anything, Minor in Leadership[®]

04 現状の課題と今後の展望

各施策の連携を推進している一方で
4年間(2年間)を見たときに
軸となる一貫した専線の確立が不十分



2028年度に向けて検討中
4年間(2年間)を貫く一本の軸を創る
→体系的なキャリア科目の構築




24

スライド1

第9分科会 大学におけるアセスメントテスト（ジェネリックスキル測定テスト）の活用事例

「学修成果の可視化が支える学びの循環」
—学生支援・授業改善・教育改革に向けて—

京都橘大学
教学事務部 教務課
山本 博子



スライド2

目次

- 1 京都橘大学の概要
- 2 PROGの実施目的・実施方法
- 3 活用事例① 学生支援・キャリア支援への活用
- 4 活用事例② 共通教育課程における授業活用・学修成果の評価
- 5 活用事例③ 専門教育課程における学修成果の評価
- 6 課題と今後の展開

スライド3

2026年度 文理多彩な10学部18学科へ



教育理念 「自由！共生！臨牀の知」

学生数 7,033人（2026年2月現在）

就職率 93.3%
大学通信実践就職率ランキング
2年連続 京都府内第1位

文系・理系・医療系の学部・学科が1拠点に集う
総合大学だから実現できる学科の垣根を越えた学び



スライド4

2 PROGの実施目的・実施方法


目的・位置づけ
学生が自らの汎用的能力に対する自己理解を深め、これまでの振り返りと今後の学習目的や就業意識を高めること、および全学科の1回生と3回生に対して実施することにより学修成果を定量的に把握することを目的とする。また、PROGの受験結果は多くの学科でアセスメント・リストに含まれており、学生の学修成果を評価するにあたって、評価指標の一つとされている。

導入年度 2016年度 **対象** 全学部・学科の1回生および3回生

実施時期
1回生：入学直後（4月）
3回生：4月・7月・10月 ※学科により実施時期が異なる

実施方法
【受験】1回生：オンライン 3回生：原則、対面（欠席者：オンライン対応）
【解説会】全回生：オンライン

教員フィードバック
教務委員会での教員向け結果報告会を実施。一部学部では、個別の報告会を実施




スライド5

3 活用事例① 学生支援・キャリア支援への活用

（事例1）ポータルサイトでの個人結果表示

学習管理システム（LMS）やディプロマ・サプリメント（学位証書補足資料）で個人結果表示

学生および教員が確認でき、学生自身が成長確認するだけでなく、学生指導等においても活用



スライド6

3 活用事例① 学生支援・キャリア支援への活用


（事例2）低回生向けキャリアガイダンスでの活用

自分にあった企業や業界がよくわからない・・・

将来を考える際に、PROGの結果を参考に

- ①あくまでも参考
- ②自分が行ってみたい企業があるならそこでOK!
- ③悩んだときの一つの参考として考えてみてください

将来を悩んだときのちょっとした参考として、PROG活用を低回生向けキャリアガイダンスで取り上げている。



スライド7

4 活用事例② 共通教育課程における授業活用・学修成果の評価

(事例1) 産学公連携科目「インターンシップ I」 ※2026年度より「就業体験実習 I」へ名称変更

【対象学年】 学部2回生以上

【授業の到達目標】
事前事後学修と就業体験を通して
1 「働くこと」への理解を深めること。
2 社会で働く上で求められる能力や姿勢を学び、学修意欲を高め、今後の学生生活や卒業キャリアへの展望を持つこと。
3 多様な人と協働できる力（親和力・協働力）、物事をやり遂げる自信を創出する力（自信創出力）、主体的に動き何事にも前向きに一歩が踏み出せる力（行動持続力）を伸ばすこと。

PROG	対人基礎力	親和力 協働力
	対自己基礎力	感情制御力 自信創出力 行動持続力
	対課題基礎力	課題発見力 計画立案力 実践力

一部のコンピテンシーの伸長を授業の到達目標にしている。

スライド8

4 活用事例② 共通教育課程における授業活用・学修成果の評価

コンピテンシーマトリクス Chart

実習前

- 学生に期待する到達レベルを設定
- 自身の現時点のレベルを自己評価
- 企業が期待するレベルも踏まえ、目標設定

実習後

- 実習前に設定された学生に期待する到達レベルを踏まえ、実習学生の到達レベルを評価
- 企業の評価レベルを参考に、振り返りを行い自身の強みと課題を整理
- 今後の学生生活の目標設定を行う

PROGを受験しない2回生で、学生がコンピテンシーを意識する工夫

スライド9

4 活用事例② 共通教育課程における授業活用・学修成果の評価

(事例2) 共通教育課程の自己点検・評価

▼教育理念「自立・共生・臨床の知」に対応する教育目標を定め、共通教育課程のカリキュラムを一新

▼教育目標の到達を評価するために、教育目標とリテラシー・コンピテンシーを紐づけ、共通教育課程の自己点検・評価を今後実施する

	リテラシー				専門知識・技能				人間性・態度			
	読解力	批判的思考力	コミュニケーション力	情報活用能力	基礎知識	応用知識	実践力	専門知識	倫理観	社会貢献力	国際理解力	キャリア意識
1) 物事を多角的な視点から客観的に理解するとともに、論理的・批判的に思考する能力で、自分自身や他者に対する理解を深めることができる能力	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
2) 自ら学習目標を設定し、自身の強みや弱みや学習の進捗を把握し、必要に応じて柔軟に調整しながら進め、物事に打ち向き続ける能力	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
3) 知識を整理・整理する中で知識を体系的に理解するとともに、課題の解決に際して他者から新たな知見を発見する能力	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

スライド10

5 活用事例③ 専門教育課程における学修成果の評価

▼学科の自己点検・評価の評価指標にPROGを活用

- 学科によっては、学科のディプロマポリシー（学科DP）と紐つけた分析を実施
- 学科DPとPROGの中分類を対応させ、客観的指標から学科DPの到達状況を確認

▼1回生時と3回生時の変化を評価・分析

- カリキュラムの課題整理などに活用

スライド11

5 活用事例③ 専門教育課程における学修成果の評価

(事例1) 文学部 歴史遺産学科

【歴史遺産学科 ディプロマポリシー】

DP①文化遺産を活用できる能力を持つことで社会での文化創造に寄与しようとする意欲を身につけている

DP②文化遺産の調査・記録方法、そのプレゼンテーション能力を身につけている

DP③文化遺産の取扱や保存管理の知識をもち、研究に高めるための技術と方法を身につけている

DP④課題を設定し、資料を集め、観察、分析、考察を行う手順を修得する能力を身につけている

DP⑤現代社会に関する基本的な認識と対応能力を身につけている

スライド12

5 活用事例③ 専門教育課程における学修成果の評価

(事例1) 文学部 歴史遺産学科

【現状確認】

- リテラシーで「DP④課題を設定し、資料を集め、観察、分析、考察を行う手順を修得する能力を身につけている」の向上確認
- 協働力と統率力の低下がみられる

【課題整理】

- 協働力、統率力（DP2・3）の向上
- 対課題基礎力についても他の私立四年制大学とひけをとらないようにしたい

スライド 13

5 活用事例③ 専門教育課程における学修成果の評価
 (事例1) 文学部 歴史遺産学科

【施策】コンピテンシー向上に向けて

- (1) **高度専門フィールドワークのさらなる充実**
 - ・実習を通じて対人基礎力の向上をはかる
 - ・公務員・文化財専門職への就職数増加につながっている
- (2) **「水中考古学の京都橋大学」というブランド確立**
 - ・対課題基礎力の上昇と学生の自信創出
- (3) **企業と連携した文理融合型歴史遺産学実習の教育開発**
 「歴史遺産のデジタルアーカイブに向けた文理融合型実習」の教育開発を実施
 ⇒先端技術を使いこなし、対課題基礎力向上を目指す

スライド 14

5 活用事例③ 専門教育課程における学修成果の評価
 プロジェクト系科目の効果は？

【現状確認】

- 3年生時に計画立案力の低下が見られる
- CO型PBLの受講者は全体と変わらない
- インターンシップIの受講者は若干改善
- CO型PBLとインターンシップIの両方の受講者は大いに改善している

【課題整理】
 25年度からプロジェクト科目を変更することから、計画立案力を改善させ
 対課題基礎力を高める方法について検討を継続したい

スライド 15

5 活用事例 (まとめ)

▼**個人レベル**

- ・学生自身が成長を振り返るための参考指標
- ・学生指導やキャリア支援の補助情報

▼**組織レベル**

- ・学科や課程単位での傾向把握
- ・学修成果に関する課題の可視化

学修成果を多面的に捉えるためのひとつの指標として、外部視点から俯瞰的に把握し、「可視化と対話」に活用

スライド 16

6 課題と今後の展開

【課題】

▼**運用上の課題**
 3年生の受験率が低下。学年特性を踏まえた受験方法や支援方策の検討が必要

▼**評価・分析上の課題**

- ・全学科が足並みを揃えてPROGの活用ができていない
- ・全学で活用していくために、学内でのデータ共有やデータを用いた議論の場
あり方を検討する必要がある

▼**教学マネジメント上の課題**
 本学では相関は把握できても、教育内容・手法とPROG結果の因果性の特定には
 十分には活用できる手法を見いだせていない

スライド 17

6 課題と今後の展開

【今後の展開】出口と教育をつなぐ中間指標の一つとして活用

▼(本学が考える)学修成果の**明確化**
 学科DPや教育目標とPROG項目の対応を「仮説」として整理
 ⇒育てたい学生像を設定し、外部と比較した評価指標としてどう活用するか(何をしたいか、何をしたいか)

▼**データを用いた対話の場の形成**
 「数値の良し悪し」ではなく、「なぜこの傾向が出ているか」を教職員で議論する文化づくり

▼**学修者本位の教育への循環**
 可視化 ⇒ 課題整理 ⇒ 改善・改革 ⇒ 再可視化

▼**学修成果を基盤に、学年進行・学生層別のキャリア形成支援を体系的に展開**
 学生の成長の可視化を通じて社会的・職業的自立を支援

**学修成果を基軸とした教育・学習支援・学生支援を通して、
 本学ならではの学修者本位の教育の実現を目指す**

スライド1

大学コンソーシアム京都 2025年度 第31回FD・SDフォーラム 第9分科会
「大学におけるアセスメントテスト（ジェネリックスキル測定テスト）の活用事例」
(2026年3月1日)

大阪工業大学における
PROG スコアの傾向と活用

工学部教授・教務部長
椋平 淳

大阪工業大学

スライド2

1. 大学概要

◆大阪工業大学 (OIT)

- 1922年：「関西工学専修学校」として創立
- 2022年：創立100周年
- 建学の精神
「世のため、人のため、地域のため、
理論に裏づけられた実践的技術を持ち、
現場で活躍できる専門職業人を
育成する」
- 卒業生：累計 11万人強
- 教職員：297人+176人 (2025年度)

◆学部

- 工学部 (8学科、入学定員900名 @大宮)
- IT・ITeX&デザイン工学部 (3学科、入学定員280名 @福田)
- 情報科学部 (5学科、入学定員460名 @枚方)
- 知的財産学部 (1学科、入学定員140名 @大宮)

スライド3

2-1. 本学の特徴といえば…

多様な実践的活動

スライド4

3. PROG導入の経緯

- ◆2012年度
 - 工学部で試行
*受験対象：学生プロジェクト参加学生 & 国際PBL参加学生
計150名ほど
- ◆2014年度
 - 工学部全学科で導入
- ◆2016年度
 - 文科省AP事業に選定 (2016-2019)
 - 「学修成果の可視化」の一要素として工学部/全学科への導入決定
- ◆2017年度～
 - 全4学部17学科で実施

⇒ 結果：全国平均よりも高い

スライド5

4. AP (大学教育再生加速) 事業での本学の取組

◆「卒業時の学生の質保証」を推進する制度構築と実効的運用

- ◆ディプロマ・サプリメント (DS) システム
 - ディプロマ・サプリメント (学修成果補助証明書) 導入
 - ミニマム・リクワイアメントと分野別達成目標の整備
 - カリキュラム・マトリックスの整備
 - 「累計GP」の活用 (GPAだけでなく)
 - 達成度確認テストの導入
 - 卒業研究着手要件の見直し
 - キャリア形成支援手帳導入
- ◆PROGテストによるメタ認知・自己学修の促進
 - 4年間一貫した自己点検/指導のステップ整備
 - 各種アンケート (学生/卒業生/企業) 拡充
 - 取組全体の検証と改善作業の推進 (IR)

その他

スライド6

5-1. ディプロマ・サプリメント (DS) システム

◆独自開発した学修成果可視化Webシステム

◆可視化項目

- ◆ディプロマ・ポリシー (DP) 達成度
 - 専門科目分野別達成度
 - 卒業要件別取得単位数
 - TOEIC
- ◆グレード・ポイント (GP) およびGPA
 - 入学時学力確認テスト
 - 授業外学修時間
- ◆ジェネリックスキル (PROGリテラシー/コンピテンシー)

スライド 13

9-2. 広報フライヤー (2024年度) 掲載情報

時代と社会が変化すれば、企業が求める人物像も変わって当然です。

時代化して社会が変化すれば、経済もまた企業も数値で働き方を変えていきます。価値観も変わります。企業も数値で働き方を変えていきます。価値観も変わります。企業も数値で働き方を変えていきます。価値観も変わります。

企業はすでに将来を見据えている

5名の能力に対する調査(上位3名を抽出)

順位	調査項目	スコア
1位	問題発見力	4.20
2位	的確な判断	4.10
3位	信頼性	4.00

全国よりも高い大阪工業大学の「課題発見力」

スライド 14

9-3. 広報フライヤー (2022年度) 裏面掲載情報

このフライヤーの裏面

～ものづくりや先端分野に絡められる充実した環境～

UMEDA
AKATA

スライド 15

10-1. 幻の「IRシステム」：PROG結果利用の挫折例

◆構想：「特に支援が必要な学生を抽出し、指導に活かすシステム」

以下の3つの目的に資する学生データ(リスト)を出力する。

- 離学対策(離学者を減らす)**
「離学可能性の高い学生(離学予備群)」を抽出し、学生指導(離学予備と対策)に活かす。
- 就職支援(就職優秀者を増やす、就職困難者を減らす)**
①「ブランド企業に就職できる可能性の高い学生」を抽出し、当該企業への就職促進・支援に活かす。
②「中堅・大企業に就職できる可能性の高い学生」を抽出し、当該企業への豊富な就職支援に活かす。
③「就職で苦労する可能性の高い学生(就職困難者)」を抽出し、丁寧な支援(予備と対策)に活かす。
- 院進学支援(院進学者を増やす)**
「院進学可能性の高い学生」を抽出し、進路指導(院進学の促進・支援)に活かす。

スライド 16

10-2. 幻の「IRシステム」：開発の意図

実就職率 16年連続 関西私立大学 第1位

「超」成長できる大学です

順位	大学名(併設校)	就職率	学生数
1	大阪工業大学(併設)	97.8	2,237 / 1,651 / 350
2	近畿大学(併設)	96.8	1,024 / 910 / 111
3	京産大(併設)	95.5	1,255 / 1,000 / 255
4	神戸大学(併設)	94.5	2,263 / 1,800 / 463
5	大阪府立大	93.5	1,480 / 1,317 / 163
6	大阪経済大	92.5	1,200 / 1,243 / 43
7	大阪大	91.8	1,271 / 1,708 / 437
8	大阪府立大	91.2	2,655 / 1,108 / 1,547
9	大阪大	90.8	1,284 / 1,171 / 113
10	大阪府立大	92.5	2,071 / 1,407 / 664

スライド 17

10-3. 幻の「IRシステム」：学生抽出の仕組み

過去の学生データを用いて、ブランド企業就職と関連のある学生データ(学修成果等)を特定し、ディシジョン・ツリーを用いて閾値を計算・決定した。

2-0 就職支援(ブランド企業就職)

就職(ブランド企業)

PROGスコア

1年後期T-GPA

以下のうち、各スコアが「5以上」の場合、判定フラグに「1」が立る、加算する
・「コンピテンシー」個人差能力
・「コンピテンシー」対自己差能力

「1年後期T-GPA」が一定値以上だった場合、判定フラグに「1」が立つ

スライド 18

10-4. 幻の「IRシステム」：抽出用ウィンドウ

難易度の高いブランド企業への就職可能性を判定し、有望な学生をリストアップする

データ作成

スライド 19

10-5. 幻の「IRシステム」：出力帳票サンプル

2) 就職可能性・検討データ (工学部全学科1年, 2年, 3年, 4年)

学科平均	3.93	4.14	4.80	2.75	4.53	3.33
総合平均 (工学部平均)	4.00	4.24	5.00	2.75	4.53	3.33
学部標準偏差	2.31	2.31	2.31	2.31	2.31	2.31
比較基準 (学部標準偏差)	2.2	2.2	2.2	2.2	2.2	2.2

フラグ判定に用いるデータ

学生番号	氏名	性別	基礎力 (PROG)		GPA		ブランド企業 就職可能性
			対人交渉力	対自己基礎力	ブランド企業 GPA	ブランド企業 GPA	
121001	***	男	3.00	3.00	3.00	3.00	0
121002	***	女	3.00	3.00	3.00	3.00	0
121003	***	女	3.00	3.00	3.00	3.00	0
121004	***	女	3.00	3.00	3.00	3.00	0
121005	***	女	3.00	3.00	3.00	3.00	0
121006	***	女	3.00	3.00	3.00	3.00	0
121007	***	女	3.00	3.00	3.00	3.00	0
121008	***	女	3.00	3.00	3.00	3.00	0
121009	***	女	3.00	3.00	3.00	3.00	0
121010	***	女	3.00	3.00	3.00	3.00	0
121011	***	女	3.00	3.00	3.00	3.00	0
121012	***	女	3.00	3.00	3.00	3.00	0
121013	***	女	3.00	3.00	3.00	3.00	0

フラグの立った学生 (ブランド企業への就職有望な学生)

スライド 20

12-1 検討中のPROG結果分析方法①

◆「クロス集計」や「セグメント化」を追加

リテラシー総合

GPA帯	リテラシー総合			
	2.0未満	2.0-2.5	2.5-3.0	3.0以上
3	4	5	2	6
2	28	27	24	41
1	42	52	46	41
0	25	37	42	58
合計	100	111	114	146

コンピテンシー総合

GPA帯	コンピテンシー総合			
	2.0未満	2.0-2.5	2.5-3.0	3.0以上
3	5	3	7	14
2	41	48	54	63
1	47	62	55	66
0	22	22	30	19
合計	115	135	146	162

◆結果と考察例

- 3年次までのT-GPA帯別にPROG伸長度を点検した結果、GPAの高低にかかわらず、**伸長値はおおむね正の方向に分布**。
- 中位GPA帯においても一定の伸長が見られ、学修効果が一部の成績上位層に偏っていない点が示唆される?
- 全体として、工学部の教育はGPA帯を問わず、学生の成長を安定的に支えていると評価できる?

スライド 21

12-2 検討中のPROG結果分析方法②

◆コンピテンシー総合の伸長度が「高い学科」(各グラフ左)と他学科(各グラフ右)で、スコアが伸びている学生群で比較
【在学生アンケート結果とクロスさせると】

①伸長度が「高い学科」は、
「教員が要出物に質問やコメントをつけて返す」で「ひんばんにあった」の回答割合が高い傾向にあった。
②「課外活動や同好会に参加する」では、双方の学科群の経験時間に大きな差はなかった。

◆示唆①
教員によるフィードバックが与える影響

- コンピテンシーは「経験の量」ではなく「経験の質(省察)」で伸びる?
- 行動の結果に対し、教員からどのようにフィードバックを受けるかが行動特性の定着に寄与する?

◆示唆②
課外活動がコンピテンシーに与える影響

- 従来ありがちな「課外活動をやっていたら社会性が育つ」という考察は、本データからは強く支持されない?
- 課外活動学生はもともとコンピテンシーが高め?

スライド 22

13. PROG結果活用の展望

◆活用方法は多様

◆事例はあくまで参考にとどめ、
各大学の強みを生かす独自の活用方法構築を

ご清聴ありがとうございました
(atsushi.mukuhira@oit.ac.jp)